

# 産地戦略

実施主体 京都府  
 都道府県 京都府  
 対象地域 京都市、八幡市、亀岡市、南丹市  
 対象品目 ネギ（病害、ネギシロイチモジトウ及びネギハモグリバエバイオタイプBの防除）

実施期間 令和7～11年度



## 新たに取り入れる環境にやさしい栽培技術の分類

● 化学農薬の使用量の低減	温室効果ガスの削減（水田からのメタンの排出削減）	温室効果ガスの削減（プラスチック被覆肥料対策）
化学肥料の使用量の低減	温室効果ガスの削減（バイオ炭の農地施用）	温室効果ガスの削減（省資源化）
有機農業の取組面積拡大	温室効果ガスの削減（石油由来資材からの転換）	温室効果ガスの削減（その他）

## 目指す姿

九条ネギの生産量は増加傾向である。病害については、べと病、さび病、黒斑病、黒腐菌核病などの主要病害に対して、ほ場で病害の発生を認識してからの対応(臨機防除)となるために、病勢を抑えきれない事例が見られる。虫害については、シロイチモジトウでは殺虫剤の効果低下により散布回数が増加しており、ネギハモグリバエでは、従来と異なり、殺虫剤が効きにくいバイオタイプBの発生が確認されており、防除が難しくなっている。

病害については、発生前に対策を講じる予防防除により、効率的で環境負荷を低減したネギ病害の防除対策を確立し、虫害については、殺虫剤効果試験を行い、効果の高い殺虫剤を使用することにより、化学農薬の使用量の低減を図るとともに、ネギハモグリバエ防除ではさらに土着天敵に影響が少ない薬剤と天敵を組み合わせた防除方法を活用し、環境負荷を軽減することを目指す。

## 現在の栽培体系

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	備考
主な作業名 (病害)			ネギべと病の防除対策は臨機防除(発病を確認してから薬剤散布を開始)										
技術名 (病害)			多発して手遅れになる場合がある。 (薬剤を複数回(8回以上)、散布しても、病勢を抑えることができない)										
主な作業名 (シロイチモジトウ)				定植				収穫					
技術名 (シロイチモジトウ)				防除	防除	防除	防除	防除	防除	防除	防除	防除	害虫防除は1週間に1回程度の間隔で行われて、対象は主にシロイチモジトウ、ネギアザミマ及びネギハモグリバエである。 シロイチモジトウについては、化学農薬の成分使用回数(慣行)：11回
主な作業名 (ネギハモグリバエ)		播種	育苗	定植							収穫		
技術名 (ネギハモグリバエ)				化学農薬による防除									化学農薬の成分使用回数(慣行)：14回

## グリーンな栽培体系

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	備考	
主な作業名 (病害)				マニュアル参照										
技術名 (病害)														
主な作業名 (シロイチモジトウ)				定植				収穫						
技術名 (シロイチモジトウ)				防除	防除	防除	防除	防除	防除	防除	防除	防除	害虫防除は10日に1回程度を基本とするが、発生状況に応じて防除時期及び殺虫剤の種類を決定する。 シロイチモジトウについては、化学農薬の成分使用回数を7回に削減。	
主な作業名 (ネギハモグリバエ)		播種	育苗	定植							収穫			
技術名 (ネギハモグリバエ)				土着天敵に影響が少なく、 バイオタイプごとに効果のある農業による防除									化学農薬の成分使用回数：9回 土着天敵の保護・活用	

### グリーンな栽培体系等の取組面積の目標

	現状R4	目標R11	備考
(参考) 対象品目の作付面積 (ha)	<b>109</b>	▶ <b>114</b>	
グリーンな栽培体系の取組面積 (ha)	<b>0</b>	▶ <b>9</b>	
環境にやさしい栽培技術の取組面積 (ha)	<b>0</b>	▶ <b>9</b>	
省力化に資する技術の取組面積 (ha)	<b>0</b>	▶ <b>9</b>	

### 環境にやさしい栽培技術・省力化に資する技術の概要

#### 〈技術の内容・効果〉

分類	産地の慣行	新たに取り入れる技術	期待される効果
環境 省力	臨機防除 (地域の慣行) 【ネギ】 べと病 (8回以上)	▶ 発生前予防防除	化学農薬の使用回数の削減 耐性菌発生リスクの低減
環境 省力	化学農薬の成分使用回数 (地域の慣行) 【ネギ】 シロイチモジヨトウ (11回)	▶ 感受性検定による防除効果の高い殺虫剤の抽出	化学農薬の使用回数の削減 薬剤抵抗性の発生リスク軽減
環境 省力	化学農薬の成分使用回数 (地域の慣行) 【ネギ】 ネギハモグリバエ (14回)	▶ 土着天敵に影響が少なく、バイオタイプごとに効果のある農薬による防除 (薬剤感受性検定による薬剤選定)	化学農薬の使用回数の削減
環境 省力	化学農薬の成分使用回数 (地域の慣行) 【ネギ】 ネギハモグリバエ (14回)	▶ 土着天敵を保護、活用した防除体系	薬剤抵抗性の発生リスク軽減

#### 〈技術の効果の指標・目指すべき水準〉

分類	指標	現状	目指すべき水準	備考
環境 省力	化学農薬の使用回数 (回) 【ネギ_べと病】	<b>8回以上</b>	▶ <b>5~6回</b>	マンゼブ水和剤、銅水和剤中心に散布、石灰窒素施用
環境 省力	化学農薬の使用回数 (回) 【ネギ_シロイチモジヨトウ】	<b>11</b>	▶ <b>7</b>	薬効の高いIRACコード6種類の殺虫剤をローテーションで用いる。
環境 省力	化学農薬の使用回数 (回) 【ネギ_ネギハモグリバエ】	<b>14</b>	▶ <b>9</b>	薬効の高いIRACコード3種類の殺虫剤をローテーションで用いる。

### グリーンな栽培体系の普及・定着に向けた取組方針

京都府内の特産野菜の生産者へ、「京都府みどりの食料システム基本計画」に基づいた「みどりの食料システム戦略」の推進や、従来の防除対策では十分に効果が得られない薬剤感受性の低下について問題提起しつつ、本事業で明らかになった効果の高い薬剤や薬剤以外の抑制手法等の環境負荷低減・省力化技術について、京都府や他関係機関一体となって、マニュアルを活用しながら技術普及と理解促進を進める。

### 関係者の役割

関係者名	京都府農林水産部農産課	京都府農林水産技術センター	京都府農業改良普及センター	その他関係機関
役割	みどりの食料システム戦略の推進	マニュアルに関する助言・技術協力	調査や展示の設置 マニュアル等を活用した技術指導	普及センター等と連携した技術指導